**クライミングに出会ってから**

私は生まれつき中心視野が欠損しています。虫食いのように見えているので、大体の大きなものは見えますが、文字や遠くのものは見えにくく、はたから見たら視覚に障害があるようには思われませんでした。

小学校の入学時検診で初めて目が悪いことを指摘されました。それから通院しても、メガネをかけても見えづらさが改善されることはありませんでした。周りの人達にはメガネをかけても見えづらいことに対し、心ないことを言われる事もありました。そんなこともあり、目に対してコンプレックスを持っていました。

気づけば思春期に入り、目の悪いことを隠して見えるふりをするようになりました。打ち解けた人にだけは目が悪い事を話す事もありましたが、それでも見えるふりをする時もありました。

そんな私がクライミングと出会ったのは、子供がクライミングをしてみたいと一緒に行ったのがきっかけでした。最初に登り方を教わりました。いくつもあるホールドの中から、同じ色と形のシールが貼ってあるホールドを探し、そのホールドだけを使用して登るというものでした。始めは問題なく登れましたが、難しくなってくると登りながらシールを探すことができずうまく登れません。シールを登る前に探してから登ればいいんだよ、と周りの人も優しく教えてくれましたが、そんな時でも私は見えないから探せないとは言えませんでした。

そんなある時、クライミングのＴシャツを買いに行くとそのＴシャツのタグに点字がついていました。そのタグには

「見えなくてもクライミングは楽しめます」

と書いてありました。

その瞬間、私は雷に打たれたような衝撃を受けました。それはＮＰＯ法人モンキーマジックのＴシャツでした。モンキーマジックは、代表が視覚障害者でありながら、自身がクライミングを楽しく登るためのサイトガイドを発案した団体です。私はすぐにその団体が行っているクライミングスクールに申し込み、参加しました。そこでもまた雷に打たれるような衝撃を受けました。

その日は私を含めて視覚障害者と、健常者が４人ずつ参加していました。私はそれまで視覚障害者と接する機会がなく、実際に会うまでは私と同じく目の悪いことを隠しているのだと勝手に決めつけていました。

しかし、そこにいた視覚障害者達は、目の悪いことを隠すどころか、むしろ誇らしげにしているように感じました。私の顔をまじまじと近くまで覗き込んできた視覚障害の年配の女性は

「ごめんね。見えづらくてここまでこないとあなたの顔がわからないの」

と、明るい口調で話しかけてきました。それを聞いていた健常者の人が

「またそうやって、若い子の近くまで行って羨ましいなー！」

と言うと、女性はすかさず

「だって見えないんだからしょうがないじゃない！」

と笑いながら周りの人と楽しそうに話しているのを見て私は呆然としました。こんなに明るく見えないことを自虐ネタのように楽しそうに話していることが本当に衝撃的でした。気兼ねなくお互いのコミュニケーションが取れていることに

「見えないことをどんどん言っていいの？」

と思わず、私は聞いてしまいました。そうしたらそこにいた、健常者が

「こちらから目の悪いことを聞いて相手が嫌な思いをされる事が結構あるから、自分からこんな見え方でどんなことに困っているのか教えてほしい！助けてあげたくても助けられないし、見えないことを恥じなくても良いんだよ！どんどん見えないことを周りに知ってもらわないと自分が生きづらくなるだけだよ！」

と言ってくれました。そしてクライミングもそれまで見えなくてうまく登れなかったのが、ＨＫＫと言われる方向、距離、形の順にサイトガイドを健常者が教えてくれたことで、私は今まで登れなかった課題をどんどん登ることができ、自信と幸福でとても楽しい１日になりました。

この日を境に少しずつ自分の目のことを受け入れられるようになりました。

楽しかったあの空間を作りたい、そしてクライミングをもっと楽しく、目の悪いことを少しでも理解してもらえる場にできればという思いで、山梨でもモンキーマジックのイベントを開催させることが実現しました。この時、健常者の方が以前街中で視覚障害者に声をかけた時に、怒られてしまってそれから声をかけにくくなったけど、このイベントで適切な声のかけ方が分かったと言っていただけました。健常者にとっても障害者と共存していく中で、歩み寄りたいけれど中々声をかけられない人が結構いることを私は知りました。

クライミングを通じて、障害のある人もない人も、一緒にスポーツを楽しみながら助け合える、そして何より私は本当の自分を知れたような気がしました。そんなクライミングに出会えたことに感謝しています。

これからも私はクライミングを続けていくのと同時に、自分の目の悪いことを隠さずに、胸を張って生きていきたいと思います。